

終助詞「よ」のイントネーションと意味機能： 不変化詞 *man* との比較を通じて

The Intonation and the Semantic Function of Japanese Sentence-final Particle *Yo*: Through a Comparison with English Particle *Man*

坂元 敦子

Abstract

McCready (2009) argues that the English particle *man* strengthens utterances and can be interpreted as a modal in certain contexts. He further argues that the Japanese sentence-final particle *yo* has the same properties, and thus the two should be analyzed in the same way. This paper points out that his analysis of *yo* is insufficient in that the intonation of *yo* is ignored. According to Oshima (2013, 2014), *yo* occurs with three types of intonation: rising intonation, flat intonation, and rise-fall intonation. This paper argues that *yo* has both a fundamental function which all uses of *yo* have in common, and also a function which is affected by intonation. The fundamental function is (i) to tell the hearer that the speaker thinks that the hearer should know the propositional content, and (ii) to emphasize some part of the utterance which *yo* is added to. What is emphasized differs according to the intonation: *yo* with the rising intonation emphasizes the existence of speaker's intention which is not verbally expressed, *yo* with the flat intonation emphasizes the speech act, and *yo* with the rise-fall intonation emphasizes the speaker's emotion.

Keywords: sentence-final particles, intonation, speaker's intention

1. はじめに

日本語の終助詞「よ」は、年齢や性別にかかわらず、「ね」と並んで日常の会話で頻繁に用いられる。どちらの終助詞にも、命題内容には影響を及ぼさないという特徴がある。そのため、(1)の各例文はいずれも、映画が面白いということを述べている。しかし、終助詞がない(1a)は独り言のように感じられる一方で、終助詞がある(1b)(1c)は聞き手に対する発話のように感じられる。「ね」や「よ」は、命題内容とは関係のない情報を付け加えていると言える。

- (1) a. この映画は面白い。
- b. 映画は面白いよ。
- c. この映画は面白いね。

これまで、終助詞「よ」「ね」に関して、日本語学の分野を中心に様々な分析が提示されてきた(仁田・益岡 1989、益岡 1991、佐治 1991、神尾 1995、高橋 2005、Lee 2007、近藤 2008 など)。特に、両者を相対するものと捉えた上で、話し手と聞き手の知識や情報量に焦点を置いた説明が多く見られる。例えば、益岡(1991)は、話し手と聞き手の知識の間にずれがあり、対立的な関係にあると判断される場合に「よ」が用いられるとしている。

(2) 今日は誰もお客見えてませんよ。(「さびしんぼう」) (益岡, 1991, p.96)

(2)の「よ」の存在は、話し手と聞き手の知識が異なるという判断、つまり、文の情報内容を聞き手が知らないであろうという話し手の想定を表しているという。このような説明にも、確かに「よ」の働きを適切に言い当てているように思われる面はある。しかし、(3)では、聞き手に関する情報が述べられており、文の情報内容を聞き手が知らないと考えるのには無理がある。

(3) あなたはこのクラブの部長ですよ。

このような例が示すように、「よ」は話し手と聞き手の知識が異なることを示すと想定すると説明しきれない例もあり、依然として問題は残されていると言える。

英語には日本語の終助詞に対応するような表現形式はないため、直接比較することは難しいものの、英語の不変化詞 *man* を分析している McCready (2009) において、文末に現れる *man* が日本語の終助詞「よ」と同じ意味を持つと述べられている。

そこで本論文では、McCready (2009) による分析を概観し、その問題点を踏まえた「よ」の分析を提示する。McCready ではイントネーションへの言及がなかったが、それなくしては「よ」の機能を考えることはできないことを示す。構成は以下の通りである。第2節では、McCready (2009) で提示されている文末に現れる *man* および「よ」の分析を概観するとともに、問題点を指摘する。続く第3節では、前節で指摘した最も大きな問題としてイントネーションの問題を取り上げ、「よ」をイントネーションと関連付けている論文を導入する。第4節では、McCready の分析では不十分であることを踏まえて、改めて「よ」の分析を提案する。最後に、第5節でまとめを述べる。

2. McCready(2009)

2.1. McCready (2009)

McCready(2009)によると、不変化詞 *man* は、現れる位置や抑揚のつけ方によって3つに分けられる。

- (4) a. Man, it's hot.
b. Man it's hot.
c. It's hot, man. (McCready, 2009, p.637)

(4a)では、*man* が文頭に現れており、かつ、*man* とそれに後続する文の間に区切りが入るように発話される。このタイプの *man* は、文内容に対する話し手の感情を表現する効果があるという。表わされる感情は、ポジティブな場合もあればネガティブな場合もあり、文脈などの要素から影響を受ける。続いて(4b)では、同じく *man* が文頭に現れているものの、*man* とそれに続く文の間に区切りはなく、一続きで発話される。このタイプの *man* は、前述のように話し手の感情を表現する効果に加え、後続する文に含まれる尺度の程度が大きいことを示している。この場合は、暑さの程度が高い(つまり、とても暑い)ことが表わされている。最後に(4c)では、*man* が文末に現れている。発話を強めるほか、特定の環境でモーダルのように解釈されるという。

これら3つの *man* のうち、文末に現れる *man* は、日本語の「よ」とよく似ていると McCready は述べている。まず、どちらも文の真理条件には影響を及ぼさない。(5a)(5b)の差は *man* があるかどうかであり、(6a)(6b)の差は「よ」があるかどうかである。そのような差異はあるものの、いずれの文も「雨が降っている」という命題内容を述べていることに変わりはない。

- (5) a. It's raining.
b. It's raining, man. (McCready, 2009, p.703)
- (6) a. 雨が降っている。
b. 雨が降っているよ。 (McCready, 2009, p.704)

また、どちらも発話を強める作用があるという。(7) (8) では、B が A の発話を否定している。このとき、A が、自身の発言が B に受け入れられるかどうかということに気をしていると仮定すると、2 つ目の A の発話で、その発話を強めるために *man* や「よ」が使われることは極めて自然である。

- (7) A: John came to the party.
B: No he didn't.
A: John came to the party, #(man). (McCready, 2009, p.704)
- (8) A: さっきジョンが帰った。
B: 嘘!
A: 帰った #(よ) (McCready, 2009, p.705)

さらに、どちらもモーダルによる従属を許可すると述べられている。モーダルによる従属とは、照応表現が、通常アクセスできない位置にあるモーダルのスコープ内の先行詞に、意味的に依存する現象のことである。(9a) では、2 文目に出てくる *it* の意味的な先行詞である *a wolf* が *might* のスコープ内にあるため、通常、照応関係が成り立たない。しかし、(9b) のように 2 文目にモーダル (ここでは *would*) を加えることで、照応関係が成り立つようになる。

- (9) a. A wolf might come in. #It is big and hairy.
b. A wolf might come in. It would be big and hairy.

will を使ったモーダルによる従属の場合、(10a) で示されるように容認度が低い。ところが、(10b) のように、文末に *man* が付加されると容認度が上がり、1 文目と 2 文目が適切なまとまりになるという。

- (10) a. A wolf might walk in. ?It will eat you first.
b. A wolf might walk in. It will eat you first, man. (McCready, 2009, p.714)

日本語の例でも同様に、(11b) で示される通り、「よ」が付加されると容認度が上がると述べられている。

- (11) a. #オオカミが来るかもしれない。あなたを食べる。
b. オオカミが来るかもしれない。あなたを食べるよ。 (McCready, 2009, p.715)

これらの共通点はいずれも、*man* と「よ」のどちらもが会話の一貫性を最大化する働きを持つことを示している。以上のデータを踏まえ、McCready は、文末の *man* と終助詞「よ」は同じように分析することができる」と述べている。すなわち、文末の *man* も「よ」も強い主張を表わすという。ただし、「よ」が伝える内容は、聞き手にとって新情報でなくてはならない一方で、文末の *man* にはそのような制約はないため、これが両者の唯一の違いだという。

2.2. McCready (2009) の問題点

前節で確認した通り、McCready は、文末の *man* の分析が終助詞「よ」にも当てはまることを主張している。しかし、この主張にはいくつか問題点がある。一つ目は、「よ」のイントネーションへの言及が見られない点である。「よ」がイントネーションによって異なる働きを示すことは、すでに多くの文献で指摘されている(井上 1993、1995、1997、片桐 1995、Katagiri 2007、Davis 2009、森山 2010、大島 2013、Oshima 2014 など)。例えば大島 (2013)、Oshima (2014) では、「よ」が上昇調、平調(非上昇調)、上昇下降調と結びつき、それぞれに異なる機能があることが述べられている。Oshima に従うと、(12) で示されるようなイントネーションのパターンがあり得るが、それらすべてに文末の *man* の分析が当てはまるとは考えにくい。

- (12) a. 今日は外暑いよ ↑

- b. 今日は外暑いよ ↓
- c. 今日は外暑いよ ↑ ↓

二つ目として、本当に発話を強めるのかという点が挙げられる。McCreadyによると、文末の *man* も「よ」も発話を強めるという。これに従うと、(13a)よりも *man* が付加されている(13b)の方が、そして、(14a)よりも「よ」が付加されている(14b)の方が、執拗で強引な印象があるということになる。しかし、*man* を使った例文と同じような効果が「よ」を使った例文にも現れているかということについては、声の大きさやイントネーションといった他の条件に大きく左右される。

- (13) a. You don't need that.
- b. You don't need that, man. (McCready, 2009, p.703)
- (14) a. あなたに必要ない。
- b. あなたに必要ないよ。

命令文に「よ」が付加されている場合であっても、(15)のように上昇調のイントネーションを伴うと、強く命令しているような印象は受けにくいと思われる。

- (15) ちゃんと勉強しろよ ↑

さらに、この「強める」という効果があるため、聞き手に命令を受け入れさせることを確実にしたいときに使われる一方で、命令に従うであろうことに疑いがないときには使われないと述べられている。例として、(16)のような軍隊での命令が挙げられている。軍隊ほど絶対的ではないが、監督が炎天下で練習する選手に対して水を飲むよう命じる場面を想定すると、同様に命令に従うとは考えられる。しかし、(17)で示されるように「よ」が用いられても不自然とは言えない(ただし、上述の通りイントネーションの制約はある)。

- (16) a. 進め!
- b. #進めよ。 (McCready, 2009, p.710)
- (17) a. しっかり水飲め!
- b. しっかり水飲めよ。

McCready に対する三つ目の問題点は、「よ」が伝える内容についてである。McCreadyによれば、文末の *man* と「よ」の唯一の違いは、「よ」は聞き手にとっての新情報を伝えるときに使われることだということ。ところが、必ずしも新情報とは言えない場合もある。(18)のように過去に聞き手に伝えられた情報が改めて述べられる場合や、(19)のように聞き手自身に関する情報が述べられる場合、(20)のように聞き手がすでに表明した情報を繰り返す場合などである。いずれも「よ」を用いることができる。

- (18) 前にも話したけれど、あのお店はつぶれたよ。
- (19) あなたはこの会社の社長ですよ。
- (20) A: 今年の夏は暑いね。
 B: 本当に暑いよ。

最後に、*man* と「よ」が実際に使われる状況という点からも、両者を同じように扱うことには疑問が残る。どちらも話し言葉ではあるものの、会話の場面(フォーマル/インフォーマル、話し手の性別、人数)や会話参加者同士の関係(親密/疎遠、地位、年齢)を考慮すると、それぞれの使用が適切だと言える状況には大きな差があると考えられる。

このように、McCready は文末の *man* の分析が終助詞の「よ」にも当てはまると述べたが、上述のように問題点がある。そこで次節では、中でも大きな問題点だと思われるイントネーションに言及している論文を取り上げる。

3. イントネーションの問題

この節では、2節で指摘した最も大きな問題としてイントネーションの問題を取り上げる。すでに前節で触れた通り、「よ」がイントネーションによって異なる働きを見せることは、様々な論文で指摘されている(井上1993、1995、片桐1995、Katagiri 2007など)。ここでは、スペースの都合上、大島(2013)、Oshima(2014)に限定して導入する。以下の節では、まずOshimaによる終助詞「よ」の分析を概観した上で、依然として問題が残っていることを指摘する。

3.1. 大島(2013)、Oshima(2014)

大島(2013)、Oshima(2014)は、平叙文に現れる「よ」をイントネーションと関連付けて分析している。その分析によれば、「よ」は、上昇調、平調(非上昇調)、上昇下降調という3つのイントネーションを伴って現れ、それぞれ異なる働きを示すという。以下で簡単に確認する。

上昇調のイントネーションを伴う「よ」は、(i)聞き手に発話の命題内容を知らせる、(ii)その内容が、聞き手がすべきことやしてよいことと関連を持つことを示す、という2つの機能を持つという。(21)では、話し手は、聞き手が食べようとしているものが辛いことを知らせている。同時に、「その食べ物が辛い」ということが、聞き手がすべきことやしてよいこと(辛い物が苦手ならば食べない方がよい、など)と関連を持つことを示している。

(21) それ、辛いよ↑ (Oshima, 2014, p.257)

(22)のように、命題内容がすでに共通知識になっている場合もある。この場合でも、上述の(ii)の機能を持っているという。

(22) 君はまだ未成年だよ↑ (Oshima, 2014, p.262)

上昇調イントネーションを伴う「よ」には、上述の機能のほかに、聞き手に対する好意や親しみを示す機能があると述べられている。上述の「よ」とは異なり、聞き手がすべきことに関する情報は提供されず、「よ」は削除することができる。(23)で現れている「よ」は、話し手が聞き手との会話を楽しんでいることを示すために使われているという。

(23) A: 大阪の暮らしはどう?

B: うん、結構楽しいよ↑ (Oshima, 2014, p.265)

続いて、平調(非上昇調)のイントネーションを伴う「よ」は、聞き手が命題内容を事前に知っておくべきだったということを示す機能を持つと述べられている。(24)では、聞き手であるAが映画の開始時間を認識していないことを、話し手Bが非難している。

(24) A: 映画は9時からだから、ごはんを食べる時間は十分にあるね。

B: 違うよ↓ 映画は8時からだよ↓ (Oshima, 2014, p.256)

Oshimaによると、平調イントネーションを伴う「よ」には、上述の機能のほかに、少なくとも3つの機能があるという。ひとつは、話し手が命題内容に対する強い感情を持つことを示す機能である。感情の内容は、(25)のようにポジティブな場合や(26)のようにネガティブな場合、(27)のように単なる驚きの場合などがあるという。

(25) 君が手伝ってくれたおかげで早く終わったよ↓

(26) 財布、やっぱり見つからなかったよ↓

(27) わぁ雪が降ってるよ↓ (Oshima, 2014, p.266)

また、話し手が感情などを報告する際に、詠嘆的な調子を加える機能も持つ。(28)のように、話し手自身の感情や印象を述べる発話に感嘆の語調が加えられる。(25)-(27)の場合とは異なり、強調されている感情は命題内容に向けられていない。

(28) ありがとう、嬉しいよ↓ (大島, 2013, p.55)

さらに、話し手の意図や予定を表明するときにも平調イントネーションを伴う「よ」が使われるという。

(29) 臨時収入があったから今日は僕がおごるよ↓ (Oshima, 2014, p.267)

上昇下降調のイントネーションを伴う「よ」は、前述の平調イントネーションを伴う「よ」の一種だが、聞き手に共感・理解してほしいという話し手の願望が示され、子供じみた調子が増えられるという。

(30) (外に出て運動すべきと言われたことに対して)

外は寒いよ↑↓ (Oshima, 2014, p.269)

次のように、話し手が共感を求めている場面では不適切となる。

(31) #君が手伝ってくれたおかげで早く終わったよ↑↓ (Oshima, 2014, p.269)

以上のように、Oshima は、「よ」が3種類のイントネーションを伴って現れることを示した。それぞれ、上昇調イントネーションを伴う「よ」には2つの機能、平調(非上昇調)イントネーションを伴う「よ」には4つの機能、そして上昇下降調イントネーションを伴う「よ」には平調イントネーションの一種として平調イントネーションの4機能に共感を求めるニュアンスを加える機能がある。

3.2. 大島 (2013)、Oshima (2014) の問題点

前節で確認した通り、Oshima は「よ」をイントネーションと関連付けて分析している。しかし、いくつか不十分な点がある。一つ目は、上昇調イントネーションを伴う「よ」に、好意や親しみを示す機能があるのか、という点である。(32)は、(23)においてポジティブだったBの返答をネガティブなものに変更した例である。この場合、「よ」によって聞き手であるAに対して好意や親しみが示されているとはいいがたい。

(32) A: 大阪の暮らしはどう?

B: うん、うんざりしているよ↑

二つ目は、平調イントネーションを伴う「よ」の機能として挙げられている意図や予定を示すという働きについてである。(33a)は(29)の「よ」を削除したもの、(33b)は終助詞を「ね」に変更したものである。「よ」が使われていなくても、依然として話し手の意図や予定を表わしていることに変わりはない。少なくともこの機能は「よ」に特有とは言えないと考えられる。

(33) a. 臨時収入があったから僕がおごる。

b. 臨時収入があったから僕がおごるね。

さらに、平調イントネーションを伴う「よ」は、聞き手が命題内容を事前に知っておくべきだったということを示す機能を持つとのことだったが、これは、その命題内容を前もって知ることができたと合理的に予測できる文脈に限られるという。そのため、(34b)のように、聞き手が命題内容を前もって知ることができたと合理的に予測できない文脈においては、その使用が不適切になるとされている。

(34) [アラキは本屋をモリノはPCショップを経営。2人は仲が良く、互いの店によく立ち寄る。アラキがPCショップにやってくる、店員に「モリノさん今忙しいかな」と尋ねる。]

b. (モリノは日曜休み。アラキは知っていたが、今日が日曜だと忘れていた。)

今日は日曜だからお休みです{よ↓/φ}

b. (今日は月曜で、モリノはいるはず)

今日は風邪でお休みです{#よ↓/φ}

(Oshima, 2014, p.258)

しかし、(35)が示すように、合理的に予測できなくても、平調のイントネーションを伴う「よ」を問題なく使える例はある。

(35) A: 最近会わないけれどどうしてた?

B: 実は入院していたんだよ↓

最後に、Oshima では、上昇調イントネーションを伴う「よ」には2つの機能、平調イントネーションを伴う「よ」には4つの機能、加えて上昇下降調イントネーションを伴う「よ」と多数の機能が挙げられていたものの、

それらの機能同士のつながりについては、はっきりとした言及がなかった。特に、平調イントネーションを伴う「よ」の4機能は多様だが、同じ形式、かつ同じイントネーションを伴う以上、何らかの関連があると考えられる。

このように、Oshimaは「よ」の機能にイントネーションが大きく関わっていることを明らかにしたが、それでもなお、問題は残っていると言える。次節では、これらの問題点を含め、「よ」の様々な働きを包括的に説明できる分析を試みる。

4. 「よ」の機能

2節で確認した通り、McCready(2009)において、終助詞「よ」は文末の *man* と同じ機能を持ち、いずれも発話を強めるとされているが、この分析にはいくつか問題点があった。この節では、これまでに指摘した問題点を踏まえて、改めて「よ」の機能を提案したい。

なお、前節で見た通り、終助詞「よ」はイントネーションによって異なる働きを見せる。「よ」という終助詞自体が持つ意味とイントネーションが持つ機能を分けて考える分析もあるものの(片桐1995、Katagiri 2007、Davis 2009)、終助詞とイントネーションが組み合わさった全体をひとまとまりとして捉える分析が主流となっている。またイントネーションについては、上昇調と平調の2種類に大別する分析が多い中、大島(2013)、Oshima(2014)は、「よ」が上昇調、平調(非上昇調)、上昇下降調の3種類を伴うことを示している。本論文でも、大島(2013)、Oshima(2014)に従い、「よ」は3種類のイントネーションを伴うと考える。

この節では、「よ」の機能が、イントネーションにかかわりなく共通する基本的な部分と、イントネーションによって異なる部分から成ることを提案する。まず、「よ」の基本的な機能は、2つの側面からなると考える。すなわち、「よ」が付加された文の命題内容を情報の受け取り手は知るべきだという話し手の判断を示すことと、話し手の意図を適確に伝えるために強調することである。イントネーションによって異なるのは、その強調する対象である。

少し補足すると、そもそも、会話でのやりとりには、「よ」の有無にかかわらず、お互いに相手が知るべきと判断した内容が含まれているものだと思う。ただし、「よ」が付けられることによって当該文が目立つため、「情報の受け取り手はその文内容を知るべきだ」というその時点での話し手の判断をより明確に表わすことができる。この効果が、文末表現によって「よ」の出現に差があることにもつながると考えられる。次の例では、aが「だ・である」という普通形の文末、bが「です・ます」という丁寧形の文末となっている。この発話が会話におけるやりとりに現れていると想定すると、(36a)(37a)では、「よ」を削除すると不自然になる一方で、(36b)(37b)では、「よ」を削除しても不自然にはならず、むしろ削除したものの方が好まれる場合もある。

- (36) a. この先においしいケーキ屋さんがあるよ↑
b. この先においしいケーキさんがあります{よ↑/φ}
(37) a. 来週の月曜日は祝日だよ↓
b. 来週の月曜日は祝日です{よ↓/φ}

これには、「です・ます」という丁寧形が使われる状況と関係があると考えられる。一般的に、丁寧形は、初対面の人や目上の人と話す場合、もしくは公の場で使われる。そのような場で「よ」を使うと、上述の基本的機能により、「この文内容を知るべきだ」という話し手の判断を明らかにすることになり、情報の受け取り手に対して押しつけがましい印象を与えかねない。こういった失礼さを回避するために、丁寧形の文末が用いられるときには「よ」も現れにくいのではないかと考えられる。

このような話し手の判断を示すことに加え、さらにイントネーションが、話し手の意図の伝達を補助する。McCready(2009)における「強調」が強く主張することを意味し、聞き手に文内容を受け入れさせる方向でのみ発揮されていたのに対して、ここでは3つのイントネーションによって強調される部分が異なると考えたい。このとき、「よ」がどのようなイントネーションを伴うかということが、文全体の文末のイントネーションを決

定するということにも注意を払いたい。Katagiri (2007) は、Pierrehumbert and Hirshberg (1990) を受けて、上昇調イントネーションは当該発話が後続する発話と同じまとまりに属することを示し、下降調イントネーション(本論文では平調イントネーションに該当する)は当該発話に後続する発話から新たなまとまりが形成されることを示すと述べている。つまり、上昇調イントネーションは継続を示しており、平調イントネーションは区切りを示しているということになる。(38)は、益岡(1991)で取り上げられていた例である。益岡(1991)ではイントネーションへの言及がなかったが、Bの発話に現れている「よ」は、上昇調、平調、上昇下降調のいずれのイントネーションをも伴うことができると思われる。仮に上昇調イントネーションが採用された場合、Bの発話は、「よ↑」が強調する対象を踏まえた上でのAによる発話ないし行動の継続が期待されることを示す。一方、平調イントネーションが採用された場合、Bの発話は、「よ↓」が強調する対象を表わし、そこでAB間のこのやりとりに一区切りをつけることを示す。

(38) A: アメリカ人はあまり働きませんね。

B: いや、よく働きますよ。

(益岡, 1991, p.95)

発話に「よ」が使われたときには、上述の「よ」が持つ基本的機能、「よ」が伴うイントネーションによって強調される対象、文全体の文末イントネーションを総合的に考慮する必要があると考えられる。次節以降、「よ」が伴うイントネーションに従って、それぞれの機能を考える。

4.1. 上昇調イントネーション

上昇調イントネーション(「よ↑」)が強調するのは、「よ↑」が付加された文では直接言い表わされていない言外の意味が存在することである。(39)は、益岡(1991)において取り上げられている例だが、上昇調イントネーションが自然である。この例文では、聞き手の上着に何かが付着しているということが述べられている。文末に「よ↑」が付加されていることで、「取った方がいいですよ」「私が取りましょうか」といった、文内容以外の意味が存在することが強調されている。

(39) 上着に何かついていますよ。

(益岡, 1991, p.95)

ここで、言外の意味の存在は、「よ↑」によって強調されているに過ぎないため、(40)のように「よ↑」を削除したからといって、言外の意味が存在しなくなるわけではない。ただし、(40)では終助詞そのものがないため、前節で言及した「よ」の基本的な機能である「情報の受け取り手は文内容を知るべきである」という話し手の判断も明確には示されていないことになる。そのため、(40)は、(39)に比べると、単に聞き手の上着に何かが付着していることを描写しているだけの印象が強くなる。

(40) 上着に何かついています。

また、(39)と同様に、(41)では、聞き手が未成年であるという文内容以外に「お酒を飲んではいけない」「結婚なんてまだ早い」、(42)では、当該の本が面白かったという文内容以外に「あなたにも読んでほしい」「ぜひ買うべきだ」、(43)では、話し手が前日に3時間待ったという文内容以外に「なぜ連絡をよこさなかったのか」「あなたは謝るべきだ」などといった言外の意味があることが、「よ↑」が付加されることによって強調されている。

(41) あなたはまだ未成年だよ↑

(cf. 井上, 1997, p.64)

(42) この本、とても面白かったよ↑

(43) 昨日は3時間も待ったんだよ↑

4.2. 平調(非上昇調)イントネーション

平調(非上昇調)イントネーション(「よ↓」)が強調するのは、発話行為である。例えば、(44)の場合、春はいい季節だと述べるAに対して、Bは自身が花粉症であることを伝えており、聞き手の認識とは異なる事実を持ち出す発話に「よ↓」が付加されている。聞き手に対して「異論を唱える」、もしくは聞き手が知らないということを「批判する」、というような行為が強調されている。

(44) A: 春は暖かくていい季節ですね。

B: いやあ、私は花粉症なんですよ↓

同様に、(45)では、話し手の意向を述べる発話に「よ↓」が付加されており、先の行動を約束することや、話し手の意思を表明することが強調されている。(46)では、聞き手の行動に対して警告することや、聞き手に危ないところから下りるよう命令することが強調されている。

(45) じゃ、私が行きますよ↓

(井上, 1997, p.63)

(46) そんなところに上ったら危ないよ↓

4.3. 上昇下降調イントネーション

上昇下降調イントネーション(「よ↑↓」)が強調するのは、話し手の感情である。大島(2013)、Oshima(2014)によると、上昇下降調は平調の変種であり、「平調のかわりに上昇下降調を用いると、発話に子供っぽく甘えたニュアンスが加わり、話者が聞き手に同情を求める気持ちが表明される」(Oshima 2014)という。本論文でも基本的に同様の立場をとる。加えて、強調される話し手の感情はネガティブなものであることを指摘したい。(47)では、景色を見ようとしたのに見えないといういら立ちや不満が強調されている。何も見えないことが期待され喜ばしいような状況を考えると、(48)のように、上昇下降調を伴うと不自然な発話となる。

(47) (望遠鏡を覗いたが、霧がかかっている何も見えない)

なんにも見えないよ↑↓

(大島, 2013, p.56)

(48) (外から見えない加工がなされたガラスを通して見て)

?なんにも見えないよ↑↓

同様に、(49)は「歩きにくくて不便」「寒い」など不快な感情が強調され、雪が積もったことを歓迎する状況では不適切となる。日本語のネイティブスピーカーが(49)の発話を聞くと、話し手がネガティブな感情を持っていると感じる。

(49) 雪が積もっているよ↑↓

4.4. McCready (2009) の問題点に対して

この節では、前節までで提案した「よ」の機能に従うと McCready の問題点に対してどう説明できるかについて確認したい。まず、McCready(2009)ではイントネーションへの言及がなかったが、前節までで見た通り、日本語の「よ」は、大きく分けて3つのイントネーションを伴う。(50)は(12)の再掲である。上昇調を伴う(50a)では、外が暑いという文字通り以外の意味があることが強調され(例えば「コートは必要ない」「薄着をした方がいい」など)、平調を伴う(50b)では、聞き手に対して「報告する」「警告する」といった発話行為が強調され、上昇下降調を伴う(50c)では、外が暑いことに対する話し手のネガティブな感情が強調されている。

(50) a. 今日は外暑いよ↑

b. 今日は外暑いよ↓

c. 今日は外暑いよ↑↓

続いて、本当に発話を強めるのか、という点である。これについては、強める場合はあるものの、イントネーションに限られていると言える。McCreadyによる文末の *man* の分析と最も近いのは、平調イントネーションを伴う「よ」だと言えるだろう。既に述べた通り、McCreadyにおける「強調」が強く主張することを意味していたのに対して、本論文における「強調」はイントネーションによってその対象となる部分も異なり、結果として受ける印象も異なる。

また、伝える内容は、聞き手にとって新情報とは限らない。ただし、「『よ』が付加された文の命題内容を情報の受け取り手は知るべきだ」という話し手の判断を示す」という基本的機能があるため、新情報が伝えられることももちろんある。そのほかにも、「よ」が付けられた文では、聞き手が忘れていた情報が伝えられたり(= (51))、

発話時点で重要だと思われる情報が伝えられたりする (= (52) (53))。なお、(51)-(53)は(18)-(20)の再掲である。

- (51) 前にも話したけれど、あのお店はつぶれたよ。
- (52) あなたはこの会社の社長ですよ。
- (53) A: 今年の夏は暑いね。
B: 本当に暑いよ。

5. おわりに

本論文では、英語の不変化詞 *man* を扱った McCready (2009)における文末の *man* と日本語の終助詞「よ」の分析を出発点に、「よ」の機能を考察した。McCready では、文末の *man* の分析がそのまま「よ」にも当てはまると述べられていたが、ここまで見てきたように、同じように扱うことは難しいと思われる。

「よ」の機能は、基本的な部分とイントネーションによって異なる部分から成っており、いずれのイントネーションを伴う場合も、命題内容を超えた部分に話し手の発話の意図が隠されているという共通点がある。これは、話し手からすれば「適切に伝えるため」だが、それは同時に、聞き手からすれば発話解釈の糸口にもなる。つまり、「よ」とイントネーションを合わせて考えることで、どの方向に推測を働かせて当該発話にかかる話し手の意図を解釈すればよいのかを知る手がかりとなる。

謝辞

本論文の執筆に際しご指導くださった中西公子先生と、貴重なコメントをくださった査読者の方々に心より感謝申し上げます。

参考文献

- Davis, Christopher (2009). Decisions, Dynamics and the Japanese Particle *yo*. *Journal of Semantics*, 26, 329-366.
- 井上優(1993).「発話における『タイミング考慮』と『矛盾考慮』: 命令文・依頼文を例に」.『国立国語研究所研究報告集』14, 333-360.
- 井上優(1995).「方言終助詞の意味分析」.『国立国語研究所報告集』16, 161-184.
- 井上優(1997).「もしもし、切符を落とされましたよ—終助詞『よ』を使うことの意味—」.『言語』26, 62-67.
- 神尾昭雄(1990).『情報のなわ張り理論』, 東京: 大修館書店.
- 片桐恭弘(1995).「終助詞による対話調整」.『言語』24, 38-45.
- Katagiri, Yasuhiro (2007). Dialogue functions of Japanese sentence-final particles 'Yo' and 'Ne'. *Journal of Pragmatics*, 1313-1323.
- 近藤安月子(2005).『日本語学入門』, 東京: 研究社.
- Lee, Duck-Young (2007). Involvement and the Japanese interactive particles *ne* and *yo*. *Journal of Pragmatics*, 363-364.
- 益岡隆志(1991).『モダリティの文法』, 東京: くろしお出版.
- McCready, Eric (2009). What *man* does. *Linguistics and Philosophy*, 31 (6), 671-724.
- 森山卓郎(2010).「文の意味とイントネーション」. 宮地裕(編)『講座 日本語と日本語教育』(pp. 147-168). 東京: 明治書院.
- 仁田義雄, 益岡隆志 (1989).『日本語のモダリティ』, 東京: くろしお出版.
- 大島デイヴィッド義和 (2013).「日本語におけるイントネーション型と終助詞機能の相関について」.『国際開発研究フォーラム』43, 47-63.
- Oshima, David Yoshikazu (2014). On the functions of the Japanese discourse particle *yo* in declaratives. In Eric McCready, Katsuhiko Yabushita, and Kei Yoshimoto (eds.), *Formal Approaches to Semantics and Pragmatics: Japanese and Beyond* (pp. 251-271). Heidelberg: Springer.
- 高橋太郎 (2005).『日本語の文法』, 東京: ひつじ書房.